

院御願寺領の形成と展開－中世前期の最勝光院領を素材に－

高橋一樹

The Formation and Development of Royal Gogonji Lands: The Saishokoin Temple Lands in Early Medieval Japan

はじめに

- ① 最勝光院領の立莊
- ② 立莊の縦縛と仏事体系
- ③ 莊園支配の変質

おわりに

〔論文構成〕

王家や摂関家の中世莊園は、それぞれの家政機関（院・女院庁や摂閥家政所）や御願寺に付属するかたちで立莊・伝領される。本稿はこのうち王家の御願寺領莊園群の編成原理と展開過程の分析を通じて、個別研究とは異なる角度から中世莊園の成立と変質の実態について論じた。具体的な素材は、関連文書と公家日記等の記録類とを組み合わせて検討し、十二世紀後葉に建立された最勝光院（建春院御願）の付属莊園群をとりあげた。最勝光院領の編成と立莊については、落慶直後から寺用の調達を目的に六莊園がまとめて立莊され、その後も願主の國忌（法華八講）などの国家的仏事の増加に対応して新たに立莊が積み重ねられた。その前提には、願主やその姻族（中央貴族）たちの寺用未進に対処すべく、同院政所を構成する別当・公文の主導の鎌倉幕府の成立した十三世紀以降の最勝光院は、各莊園の預所職を知行する領家もと寺用にみあう下地を莊園内で分割して、その特定領域における領家の所務を排除する事例が多くみられた。下地を分割しない場合も含めて、これらの寺用確保の下支えになつたのは地頭請所であり、その背景には幕府との政策連携があつたことが推測される。これは領主制研究の枠組みのみで論じられてきた従来の下地中分論や地頭請所論とは大きく異なる評価であり、莊園制支配の変質と鎌倉幕府権力との関係を問う連携にもとづく国衙側と協調した收取関係（加納・余田の設定）をもつ中世莊園の形

成であった。また、最勝光院領に典型的にみられる立莊と仏事体系のリンクが、御願寺および付属莊園群の伝領を結びつけており、御願寺の繼承者が仏事を主催し付属莊園から用途を徵収する現象の原理をここに見いだしう。

鎌倉幕府の成立した十三世紀以降の最勝光院は、各莊園の預所職を知行する領家（中央貴族）たちの寺用未進に対処すべく、同院政所を構成する別当・公文の主導のもと寺用にみあう下地を莊園内で分割して、その特定領域における領家の所務を排除する事例が多くみられた。下地を分割しない場合も含めて、これらの寺用確保の下支えになつたのは地頭請所であり、その背景には幕府との政策連携があつたことが推測される。これは領主制研究の枠組みのみで論じられてきた従来の下地中分論や地頭請所論とは大きく異なる評価であり、莊園制支配の変質と鎌倉幕府権力との関係を問う視角も含めて問題提起を行つた。